

中島 敦

巡査の居る風景



巡査の居る風景

——一九二三年の一つのスケッチ——

磔石しきいしには凍った猫の死骸が牡蠣かきのようにはばりついた。その上を赤い甘栗屋あまぐりやの広告が風に千切ちぎれて狂いながら走った。

町角には飲食店の屋台が五つ六つかたまって盛さかんに白い湯気を立てていた。赤黒くカチカチに固くなった乳房を汚れたツルマキの上から出した女が一人、その前に立って湯気を吹きながら真赤まっかに唐辛子をかけた餛飩うどんを啜すすつ

ていた。

署から帰ろうとして巡査の趙教英ちようきようえいは電車を待ちながら、それをぼんやり眺めていた。彼の前を急いで二人の浅黄服あさぎふくを着た支那人が、天秤棒てんびんぼうをかついで過ぎて行った。彼等の籠の中には売れ残りの大根が白く光っていた。そろそろ潮のように人混みが出初める頃であった。薄氷うすごおりを張ったような暮方くれかたの空の下で、仏蘭西教会フランクスの鐘が寒む寒むと響き出した。

趙教英は寒そうに鼻をすすって首を縮めると、制服の詰襟つめえりの前を一度かけなおして電線の青白い火花を見上げ

た。その電車が行ってしまった後の線路を背の高い男が一人大勝おおもたに歩いて来た。彼の署の課長であった。彼が恭うやうやしく敬礼すると、その男も鷹揚おうようにちよつと手を挙げて、また人混みの中に紛れこんでしまった。

電車に乗ると、職業上無料の彼はいつものように運転手台に立って、両手をズボンのポケットにつっこんだまま、硝子ガラスに倚よりかかった。彼は電車に乗る度たびにきつと一人の日本の中学生のことを思い出すのだ。………ある夏の朝だった。署に出る途中彼がいつもの運転手台に立

っていると、登校の途中のその中学生が乗り込んで来たのだ。そして多分涼しい風にあたりたいためらしく、その中学生は運転手台に立っていて中にはいらなかった。が、元来立つべき所ではなし、運転の邪魔にもなるというので、運転手は中学生に中にはいってくれと言ったのだ。ところが彼は傲然^{ごうぜん}として運転手に喰ってかかった。「オイ、その人を。」と、中学生はそこに立っていた巡查の彼を指して、

「その人を中へ入れないんなら、俺もいやだよ。」——
(もちろん、その運転手も朝鮮人であるからなのだ。)

——そして当惑した運転手と巡査との顔を面白そうに見比べながらそこに立続けたのであった………。彼は今もこの中学生の目付を思い出して不愉快に思った。

電車の中は混んでいた。スケートをぶら下げた学生。

鼻を真赤にした会社員風の男、買物包をかかえた奥さん。子供を尻にのせたオモ二、厚い茶色の毛皮に襟を埋めた両班^{ヤンバン}達。

しばらくすると、突然その中から何か言い争う声が聞えて来た。乗客の視線は一斉にその方に向けられた。見

ると、腰かけている粗末な姿なりをした一人の日本の女と、その前の吊革につかまっている白い朝鮮服をつけた学生らしい青年とが言い合っているのであった。

——せっかく、親切に腰かけなさい、いうてやったのに。——と女は不平そうに言っているのだ。

——しかし、何だヨボとは、ヨボとは一体何だ、——

——だから、ヨボさんいうてるやないか、

——どっちでも同じことだ。ヨボなんて、

——ヨボなんていやへん。ヨボさんというたんや、

女には何にも分らないのだ。そして怪けげんそうな顔付

をして、他の人達の諒解りようかいを得ようとするかのようになり、
たりを見まわして、

——ヨボさん、席があいてるから、かけなさいて、親切にいうてやったのに何をおこつてんのや。

車内には所々失笑の声が起こった。青年はもう諦あきらめてしまつて、黙つてこの無智な女を睨にらみつけた。教英はまたしても憂鬱になつて行つた。なぜこの青年はあんな争論をするのだ。この穏健な抗議者はなぜ自分が他人であることをそんなに光榮に思うのだ。なぜ自分が自分であることを恥じねばならないのだ。………彼はその日の午

後の出来事を思い出した。

その日の午後、府会議員の選挙演説を監視するため、彼は同じ署の高木という日本人の巡査と共に会場である幼稚園に出かけたのだ。何人かの内地人候補の演説について、たった一人の鮮人せんじん候補の演説が初まった。商業会議所の頭もやったことのある、内地人の間にも相当人望のあるこの候補者は巧たくみな日本語で自分の抱負を述べ立てていた。が、その最中に、一番前に居た聴衆の一人が立上って、「黙れ、ヨボの癖に。」と怒鳴ったのだ。二十にもならぬ位の汚ないなりをした小僧であった。高

木巡査はいきなり、そいつの襟首をつかまえて場外に引ずり出してしまった。と、その時この候補は一段と声を高くして叫んだのだ。

——私は今、すこぶる遺憾な言葉を聞きました。しかしながら、私は私達もまた光栄ある日本人であることをあくまで信じているものであります。

するとたちまち場の一隅から盛な拍手が起って来たのだ。………

彼は今これを思い出した。そしてその候補をこの青年と比べてみた。それからもう一度日本という国を考えて

みた。朝鮮という民族を考えてみた。自分というものも考えてみた。更に、自分の職業を、それから、今そこに帰ろうとしている妻と一人の子供のことを思い浮べた。

事実彼の気持は近頃「何か忘れ物をした時に人が感じる」あのどことなく落ちつかない状態にあった。果されない義務の圧迫感がいつも頭のどこかに重苦しく巣くっているといった感じでもあった。しかしその重苦しい圧力がどこから来るかということについては、彼はそれを尋ねようとはしなかった。いや、それが恐こわかったのだ。自分で自分を目覚ますことが恐ろしいのだ。自分で自分

を刺激することがこわかったのだ。

では、なぜ怖いのだ？　なぜだ？

その答として、彼は青白い顔をした彼の妻子を挙げる。彼が自分の職業を失ったとしたら、彼等はどうなるのだ、しかし「なるほど、それには違いない。だが、そればかりなのか。恐怖の原因はそれだけなのか？」と聞かれたとしたら………。

彼は慄然^{りっぜん}として首を縮めると、あわてて硝子^{ガラス}越^{ごし}に街々の揺れる灯と、その中を泳ぐ雑沓^{ざつとつ}とを眺めた。夕刊の鈴。自働車の警笛。凍った、舗道に映る明るい灯。その上を

滑る毛皮の群。暗い町角に佇んだ赤鬚の担手、牛のついていない肥料車、塵埃車……。

電車は昌慶苑前で下りた。

横町では強いアセチリンの光に、肺病やみの売卜者の顔が闇から浮び上った。古本屋の店先で手をぶるぶる慄かせながら、老人が声を立てて諺文を読んでいた。

角を一つ曲ると、突然彼は向うから来た一人の男にお辞儀をされた。彼も一つ鸚鵡返しに頭を下げてから見ると獵虎の襟の外套をつけた立派な紳士だった。

——ちよつとお尋ね致しますが。——と、その人は彼に非常に丁寧な言葉で、××氏——総督府の高官——の住居を尋ねたのだ。(××氏の所へ行くならこの人も高官かもしれない。) 紳士にそんな丁寧な言葉をかけられたことのない彼は、ちよつとまごつきながらその××氏の住居を教えた。彼の返事をきくと、もう一度丁寧に頭を下げて教えられた方に曲って行った……………。

と、その時だった。彼はある一つの大発見をして愕然がくぜんとしてしまったのだ。

——俺は、俺は今知らない中うちに嬉しくなっていはしな

かったか。——と彼はぎよつとしながら自分に尋ねてみた。

——あの日本の紳士に丁寧な扱あつかいを受けたことによつてごく少しではあるけれども喜ばされていたのだ。ちようど子供が大人に少しでもまじめに相手にされると、すっかり喜んでしまうように、俺も今無意識の中に嬉しがっていたのだ……。もう先刻の青年も笑えなかつた。府会議員の候補のことも云えなかつた。

——これは俺一人の問題ではない。俺達の民族は昔からこんな性質を持つように歴史的に訓練されて来ている

んだ——。

ふと横を見ると男が道傍みちばたにしゃがんで小便をしているのだ。彼は何げなく「立小便」することを知らないこの半島の人達の風習を考えてみた。

——このちよつとした習慣の中にも永遠に卑屈なるべき俺達の精神がひそんでいるのかも知れぬ。——彼はそんなことを、ぼんやり考えてみた。

銅色の太陽はその凍った十二月の軌道を通って、震えながら赤く禿はげた山々に落ちて行った。北漢山は灰色の空に青白く鋸のこぎり形がたに凍りついているように見えた。その頂上から風が光のようにとんで来て鋭すんどく人の頬を削そいだ。全く骨も砕けてしまいそうに寒かった。

毎朝、数人の行き倒れが南大門の下に見出された。彼等のある者は手を伸ばして門壁の枯れ切った蔦つたの蔓つるをつかんだまま死んでいた。

ある者は紫色の斑点のついた顔をあおむけて、眠そうに倒れていた。

漢江かんこうの氷の上では、爺さん達が氷に穴をあけて、長い煙管きせるで煙を吹きながら寒そうに鯉をつついていた。その岸の林からは貧しい人達が温突オンドルにくべる薪をどんどん盗とって行った。薄青い山のように氷を満載して曳ひいて行く牛の顎あごには、涎よだれが氷柱になって下っていた。

雪は余り降らなかつた。路みちはカチカチに凍り固まってしまった。その路の上を色々な足が滑ったり、転ころんだりして歩いて行った。

朝鮮人の船のような木履^{ぼくり}。日本のお嬢さんのピカピカした草履^{ぞうり}。支那人の熊の足のような毛靴^{けぐつ}。今にも転びそうな日本の書生の朴齒^{ほおば}。磨き上げた朝鮮貴族学生の靴。元山から逃げて来た白色ロシヤ人の踵^{かかと}の高い赤靴。それから足も大分出かかった担手^{ちげ}——荷物を背にのせて運搬する朝鮮人——のぼろ靴。まれにはいざりの乞食の膝から下の断たれた大腿部^{だいたいぶ}。その足は寒さのため、街頭で赤くはれ上っていた。

一九二三年。冬が汚なく凍っていた。すべてが汚なかった。そして汚ないままに凍りついて

いた。殊ことにS門外の横町ではそれが甚はなはだしかつた。

支那人の阿片あへんと蒜んにくの匂い、朝鮮人の安煙草やすたばこと唐辛子の交つたにおい、南京虫なんきんむしやしらみのつぶれたにおい、街上に捨てられた豚の臟腑ぞうふと猫の生皮のにおい、それ等がその臭気を保つたまま、このあたりに凍りついてしまつているように見えた。

でも朝方だけはさすがに空気もいくらか澄んでいた。夜が明けかかって枯れたアカシヤの枝に鵲かささぎが鳴き初める頃になると、少しは清らかな呼吸も出来るのであつた。いつもその頃になると、この横町からたくさんの男がぼ

んやりしてしかし寒そうに手をこすりながら帰って行った。

そこには色々な女が集っていた。金東蓮きんとうれんもそうした女の一人であった。彼女はまだ新米で友達がなかった。ただ彼女と仲がよかったのは福美ふくみという女だけだった。姓は誰も知らなかった。その女はいつもひどく青い顔を——彼女達はみんなそうだが、殊に——していた。

「あの人は中々えらい人なんだよ。」とその女のことを隣の婆さんが彼女達に話していた。しかし、どう、えら

いのだか誰も知らなかったし、彼女もまた言おうとはしなかった。そして毎日きままって四時頃になると腕をまくって注射をした。

東蓮には、どうして、この女にそんな金があるか不思議だった。そこである時、聞いてみた。すると彼女は悲しそうに笑いながら言った。

——お前なんか、まだ新米だから、私みたいにかせ稼げるもんか。——

三

漢江人道橋の上を、砲車がカラカラと勢よく駈けて行った。永登浦の砂の上で、龍山師団の兵士達の剣尖が青い氷を映して寒々と冬日に光った。夜ごと夜ごとに演習の夜営が砂上に張られて、篝火かがりびが赤々と燃え盛さかった。

獐ノロを担かついだ学生の一団が、街上を滑りながら走って行った。シヨウ・ウインドウの中では土偶どぐうの地下女將軍の赤い顔が重々しく笑った。半分以上出来上った朝鮮神社

の鎚つちの一音が、カラカラに乾いた空の下で高らかに響いた。

高等普通学校の校庭では、新しく内地から赴任した校長が、おごそかに従順の徳を説いていた。（今まで居た内地の中学校で、彼が校規の一つとして、独立自尊の精神を説いたことを、幾分くすぐったく思い浮べながら。）

普通学校の日本歴史の時間、若い教師は幾分困惑しながら、遠慮がちに征韓せいかんの役えきを話した。

——こうして、秀吉は朝鮮に攻め入ったのです。——
だが、児童達の間からはまるでどこか、ほかの国の話
しでももあるような風に鈍^{にぶ}い反響が鸚鵡がえしに響いて
くるだけなのだ。

——そうして秀吉は朝鮮に攻め入ったのです。
——そうして秀吉は朝鮮に攻め入ったのです。

× × ×

その午後は冷たく晴れていた。

枯れた褐色の刺とげばかりになった、アカシヤの立木が北風の中で鳴って揺れた。

南大門駅の前には群衆が風にふかれて、立並んでいた。彼等は一様に駅の入口に眼を注いでいた。自働車は勢よくその降車口に馳けつけて出迎えの高官達を吐き出した。

——総督のお帰りなんだよ。

——総督が東京から帰られたんだよ。

警官は、佩はいけん剣をがちやつかせながら嚴重にあたりを警戒していた。趙教英も彼等の中にまじって人々の背後か

ら附近を見廻わしていた。彼は風に吹きよせられた新聞紙を底の破れた靴でふみつけながら、いつかも見たことのある総督の白髪の童顔を思い浮べた。この総督は今までの総督達と同じように軍人出身ではあつたけれども、今までの誰よりも一番評判がいいようであつた。鮮人達の中にも心服しているという者がかなりあるのだ。だが
………

その時厚い黒い外套に包まれて肥満した総督の人なつこい童顔が降車口から現われた。すると出迎えの役人達は一斉いっせいに機械のように頭を下げた。総督は鷹揚いっせいにそれに

会釈して用意の自働車に乗りこんだ。続いて、ひどく痩せて貧弱な政務総監も次の車に乗りこんだ。そしてすぐに二台の車は、セブランス病院の角から南大門の方に滑り出した。

するとその時だった。突然群集の中から白衣にハンテイングを着けた男が躍り出したかと思うと、やにわにピストルを持った手を伸ばして前の車をめがけて引金を引いた。弾丸は発^たま^まな^かつ^た。男はあわてて第二の引金を引いた。

今度は轟然^{ごうぜん}たる音響と共に弾丸が後の車の硝子を破壊

して斜めに車内を横ぎって炸裂した。と気のついた二台の自動車は急に速力を増して、疾駆しゅくし去った。

一瞬間、群集は呆然として、この事件を眺めた。が、次の瞬間に、警官達は本能的にこの暴漢のまわりに馳せつけた。が、兇漢きょうかんはまだピストルを持っている。彼等は兇漢と睨みあった。兇漢は二十四五の瘦形の青年だった。彼もピストルを握りしめたまま血走った眼でしばらく警官の方を睨んでいた。が突然帽子をとって磔石しきいしに力一杯たたきつけて、カラカラと自棄じきてき的に笑い出すと、いきなり手にした武器を群集の中に抛ほうり投げた。群集はさ

つと退ひいた。警官達も思わずギョツとして身を引いて、
 投げ出されたピストルを見た。……が次の刹那せつなには彼
 等は既にとびかかって兇漢を押えていた。彼は少しも抵
 抗しなかった。青ざめて幾分小刻こきぎみにふるえる口許くちもとに蔑さげ
 すむような微笑を浮べて彼は警官達を見た。青白い額しゅうしやうに
 は乱れた髪が長くたれ下っていた。眼にはもう周章しゅうしやうと
 昂奮こうふんの跡が消えて、絶望した落着きと憐憫れんびんの嘲笑ちやうしやうとが浮
 んでいるだけだった。

彼の腕を捕えていた趙教英はとてもその眼付きに堪え
 られなかった。その犯人の眼は明らかにものを言ってい

るのだ。教英は日頃感じている、あの圧迫感が二十倍も
の重みで、自分を押しつけるのを感じた。

捕われたものは誰だ。

捕えたものは誰だ。

四

客を引く女が四五人、白粉おしろいの禿げた顔を震わせながら、
例の横町の壁に倚よりかかっていた。屈折した街燈の光の
中で、立てかけた土管の影が黙々と囚人達のように並ん

でいた。

——あんだ、どう？　ちよつと。

——駄目、駄目。——男はズボンのポケットに手を入れて振って見せて笑った。毛糸の頭巾ずきんを帽子の上から冠かぶったその青年の顔が、急ぎ足で街燈の光の中から消えた。人通りがなくなると、静まりかえった空気の中に、どこからか壁の破れる音がピンと響いて来るのだ。

×

×

×

——私？ 何でもないのさ、亭主が死んで身寄りがないか。外に仕事がないければ仕方がないじゃないか。

——亭主って、何をしてたんだ。

——しょうろ鍾路で毛皮を売ってたんだよ。

淫売婦の金東蓮の部屋では、オンドル温突の油紙の上に敷いた薄い汚れた蒲団の下に足をつっこんで、色の白い職人風の男が話していた。

——で、いつ、死んだんだい？

——この秋さ。まるで突然だった。

——何だ。病気か？

——病気で、何でもない、地震さ。震災で、ポツクリやられたんだよ。

男は手を伸ばすと、酒の瓶を掴つかんでごくりと一口飲み込んだ。

——じゃあ、何かい。お前の亭主はその時日本に行つてたのか。

——ああ、夏にね。何でも少し商売の用があるって、友達と一緒に、それも、すぐ帰るって東京へ行つたんだよ。そしたら、すぐ、あれだろう。そしてそれっきり帰ってこないんだよ。

男は急にギクリとして眼をあげると彼女の顔を見た。

と、しばらくの沈黙の後、彼は突然鋭く云った。

——オイ、じゃあ、何も知らないんだな。

——エ？ 何を。

——お前の亭主はきつと、………可哀そうに。

一時間の後、東蓮は一人で薄い蒲団にくるまって暗い中で泣いていた。彼女の眼の前には、おどおどと逃げまどっている夫の血に塗まみれて火に照し出された顔がちらついた。

「あんまりしやべっちやいけないぜ。こわいんだよ。」
と去り際ぎわに云った男の言葉も頭のどこかにかすかに思い
出された。

数時間の後、やっと夜の明けた灰色の舗道を東蓮は狂
おしく駆けまわっていた。そして通りすがりの人に呼び
かけた。

——みんな知ってるかい？ 地震の時のことを。

彼女は大声をあげて昨晚きいた話を人々に聞かせるの
であった。彼女の髪は乱れ、眼は血走り、それにこの寒

さに寝衣ねまき一枚だった。通行人はその姿に呆れかえって彼女のまわりに集って来た。

——それでね、奴等やつらはみんなで、それを隠しているんだよ。ほんとに奴等は。

到頭とうとう、巡查が来て彼女をつかまえた。

——オイ、静かにせんか、静かに。

彼女はその巡查に武者振りむしゃぶつくと、急に悲しさがこみ上げて来て、涙をポロポロ落しながら叫んだ。

——何だ、お前だつて、同じ朝鮮人のくせに、お前だつて、お前だつて、………

彼女が刑務所に行ってしまったから、S門外の横町では、相変らず真黒な生活が腐った状態のまま続けられて行つた。

寒いというより、痛かつた。身体の中で心臓の外はみんな凍死してしまっているような気持だつた。道傍みちばたには捨てられた魚の鰓えらが赤く崩れ、日蔭ゆきだまの雪溜りの上には生々しい豚の頭が嚙かじり散らされていた。屋内では人々は、溝どぶから上る瓦斯ガスのような韭にらと、蒜にんにくで腐った空気を彼等の不健全な肺臓に呼吸して、辛からうじて生きていた。

すべてが変らなかつた。

毎日四時頃になると、東蓮の友達だった福美がいつものように青い腕をまくって注射をした。そういう時だけ彼女はどこかに居なくなつた東蓮のことをかすかに思ひ出すのだった。それから夜がくると、きまつて、ぼろを着た若い日本人がヴァイオリンで油のきれた車輪の軋きしるような音を立てて流して行つた。

明け方になると、まだ暗い中に、よくここに来る背の高い支那人がこの横町から出て行つた。

——おっかない星だな。——

彼はまだ暗い空を見上げて、そう云った。それからポケットに手をつつこんで金を探して見た。

——ふん。おっかねえ星だな。

も一度無意味に繰返すと、彼はまた凍いてついた路を、高く履くの音を立てて、よろめきながら帰って行つた。

五

趙教英はぼんやりと、暗い旧アメリカ領事館の前を歩いていった。彼は考えるともなく、昨夜来の事を考えてい

た。

……昨夜家に帰ってから、また急に署長から呼び出しがあったのだ。彼は急いで署に行くと、恐る恐る署長室に這入って行った。署長は黙って彼に一枚の紙と日割の給料の袋とを渡した。ははあ、来たなと思った。四五日前、徽文高等普通学校の生徒とK中学の生徒とが大勢で喧嘩をした。その懲戒について彼は課長と少し言い争ったのだ。

彼は黙ってその紙切れを受けとって表に出た。それから（家には帰らないで）灯の中をしばらくさまよって、

その金を握ったままふらふらと、S門外の淫売屋カルボチビにはいって行つた。そして今晚の今になつて、やっと出て来たのであつた。………

彼は今それを遠い昔のことのように思い出した。

うすい霧が低く這つていた。街燈の光が街路樹の枝を通して、縞になつて舗道に落ちた。

「一体、どうしろと云うのだ。」と、彼は濁つた頭の奥で、何だか他人のことでも考えるように考えた。

「彼等はどうなるのだ。」妻子の青白い顔が目前にちらつき初めた。

と、ふと彼は、彼の知っている裏通りのある二階屋の一室のことを思い浮べた。

そこには粗末な椅子が五六脚と、手製のテーブルが一つ置いてある。テーブルの上には蠟燭ろうそくが二本立っている。蠟燭の光はそこに集った同志達の顔をおぼろげに照し出す。赤い顔をして卓を叩くもの。髪をかきむしって考えているもの。黙って紙の上に鉛筆を走らせるもの。みんなが前途の希望に燃え立っているのだ。やがて彼等の間からひそひそした相談が洩れる。

「京城——上海——東京」……………

.....。

彼はぼんやりとこんな有様を画いてみた。そして自身みじの惨めさをそれに比べてみた。

「どうにかしなくてはいけないのだ。とにかく。」

気がつくとは何時の間にか殖産銀行の横に来ていた。冷たい扉を閉じたこの大きな石造建築の柱の陰にはチゲの群がその担架を横に捨てたまま石ころのように眠っていた。

「オイ、オイ。」彼は煙草臭い彼等の中に身を投ずると、

その中の一人を揺り起そうとした。

「……………」何か訳の分らぬことをいいながら、そのチゲは脂やにだらけの眼を眠そうにちよつと開けたかと思ふと、すぐにまた閉じてしまった。うるさそうに痩せた手を動かして、教英の手を払いのけて一つ寝がえりを打つと、白い田虫たむしに囲まれたその口から長い煙管きせるがコトンと舗道に落ちた。

「お前は、お前たちは。」突然何とも知れぬ妙な感激が彼の中に湧いて来た。彼は一つ身を慄ふるわすと、彼等のボロの間に首をつつこんで泣き初めた。

「お前たちは、お前たちは。この半島は……この民族は……」

(昭和四年六月)

日本文学電子図書館

「中島敦 ちくま日本文学012」

著 者：中島 敦

制作者：宮澤一郎

出版社：筑摩書房

2009年6月30日 第3刷発行



日本文学電子図書館